

会員たちの声

伝えるということ

季村 範江

震災後、テレビは連日被災地の様子を映していた。私は何を
する気にもなれず、ぼんやりと画面を見ている日が続いていた。

ある時、地震で突然家族を亡くされた人が自身の体験を切々
と語っていた。神戸の町で同じように揺れを経験しても私は無
傷でテレビを見ている、一方で愛する家族を失って悲嘆にくれ
ている人がいる。私は他人事とは思えず強く心を揺さぶられ、
現地に出向いて私に出来ることはないか、と考えるようになった。

そうして私は須磨区鷹取中学校の避難所で、自衛隊が設営し
た仮設風呂や、炊き出しのボランティアを始めた。避難所は被
災された人達と、各地から駆け付けたボランティアでゴった返
していた。しばらくして少し落ち着いた頃、世間では被災者の
自立ということが言われ出した。過剰に甘やかすのは被災者に
とっても良くない、一日も早く自立してもらわなければ、とい
うような声だったと思う。

その頃になると、私は仮設風呂で顔見知りも出来、入浴の手
伝いをしながら地震当時の話や身の上話を聞いていたが、ある
時風呂に通う女性が入浴のお手伝いをしたいと申し入れてき
た。日中は仕事をしているが、夜なら手伝えるとのこと。被災
された方からの自発的な声だったので、私を明るい気持ちにさ
せてくれた。

ところが数日後、その女性が緊急入院したと聞かされた。元
気で明るそうに見えたが、時々おかしい言動があり、とうとう

暴れて入院させられたとのこと。誰よりも早く回復したかに見えたが、実際は深く傷つき心を病んでいて、私はそのことに少しも気付かなかった、ということに強い衝撃をうけた。被災された人の傷は簡単に癒えるものではなく、自立などという言葉が他人が軽々しく言うものではない、とあらためて肝に銘じた出来事だった。

同じ頃ボランティアの仲間から、『阪神大震災地元 NGO 連絡会議』の存在を教えてもらった。そこはボランティア活動の後方支援をしているとのこと、早速元町の毎日新聞神戸支局3階の事務所を訪ねた。

後方支援といっても、避難所や仮設住宅訪問から、必要な情報を被災者の方々に提供する活動や、記録を集め残す活動など多岐にわたっていた。すぐに私は『震災・活動記録室』に配属された。震災が起こった1995年はボランティア元年といわれ、全国各地からたくさんの人が駆けつけボランティア活動を行っていた。この貴重な体験を記録として残し後世に役立てたいとの思いから、ボランティア活動の記録をボランティア自身が集める活動だった。未経験の私は教えられるままに、集まった資料の整理に追われる日々だった。

その当時収集された資料は、「震災・活動記録室」から「震災・まちのアーカイブ」に受け継がれ、今に至っている。

震災資料を後世に残すことを目指して始まった活動だったが、果たして書かれた文字や物だけで震災の記憶が他の地域の人々や未来の人々に伝わるのだろうか、被災地で起こるさまざまな問題を通して、そこで生活している人々の思いに耳を傾け

る活動も必要なのではないか、と考えるようになった。これらは、「瓦版なまず」やアーカイブ冊子として発信した。しかし、言葉に出来ない思いや、気持ちを伝えることの難しさがなんと多いことか、言葉になるには人それぞれの時間が必要で、たとえ今言葉にならなくても機が熟すのを待てばいいのではないのか、ということに徐々に気付かされた。

一方で、ずっと心の奥にしまっていたものが、地震がきっかけで表面に出た、という話を私は最近耳にした。

南輝子さんは、神戸市西区在住の画家で歌人、彼女は父親の顔を知らないで成長した。ジャカルタの製紙工場長だった南さんの父親は、終戦後日本軍への報復のために蜂起した原住民によって部下とともに虐殺され、秘かに土中深く埋められた。事件は長い間隠蔽され、彼女自身も正面から向き合うことなく生きてきた。

ところが地震の後、ずっと記憶に蓋をしていたものが一気に噴き出し、それは避けようにも避けられない程強烈なものだったという。それから南さんは戦争の絵を描き、父親の歌を詠んでいる。多くの命を奪った地震は、逆に眠っていた死者の魂を呼び覚ましたのかもしれない。この話は、たとえ当事者でなくても何十年先であっても、戦争の記憶を語り他者に伝えることは可能だ、ということ私に教えてくれた。

さまざまなことにつかって、今は震災を長い時間の流れの中でとらえるようになってきた。震災から 23 年が過ぎ、この地でも震災を体験していない世代が多くなっている。彼らに震災を語るには、残された震災資料と、そこから零れ落ちた小さ

な声との両方が必要だろうと考える。しかし一方でいまだ記憶の底に沈んでいて意識にのぼってこない思いもあるだろうと考えると、私の力など到底及ばない大変なことに取り組んでいて、まだまだ道半ばという気がしている。

埋もれようとするもの

藤原 直子

あの時のことを、今も忘れず思い出すことがある。大きな地震に揺すられた後の神戸の街と、そこで出逢った人たちのことを。

突然の地震に住居を失い、避難所、仮設住宅へと右往左往する人、解体工事で粉塵の舞う街の中を黙々と歩く人、銀行の不良債権処理に流された多額の税金に怒り、街に立つ人、被災者の生活支援を求めて、国会に座り込みに行く人。あの時、あの街で、様々に人は生き抜こうとしていた。混乱の最中で起こる問題は、この国の弱点をあぶり出しているように見え、私達の行く先にもいつか降りかかるであろうと予感させた。力のある者となし者。力のない者は、復興の影でいつもふるいの目からこぼれ落ちて行った。

「震災・まちのアーカイブ」のメンバーであった木内寛子さんが、被災後の日々を綴ったメモを残している。「情けなかった。私は両手にバケツを持って水を運んだ。お年寄りが小さな鍋ややかんに水を運んでいた。わたしに何ができるの。わたし

は、まあ若いし、まあ力もある。これはわたしの傲慢かもしれないけれども、恵まれたものは恵まれて、恵まれないものは恵まれない。新築の家がビシッとたっている横で、古い家がつぶれている。我が家からすこし北に行くと、地震などなかったような立派な家並みが続いている、少し南へ行くと、密集した家家が傾き、つぶれている。なにを恵まれたというか、それはひとそれぞれだろう、何が幸せかということも、ひとそれぞれだろう。だが、外から見ているだけだからかもしれないが、悲しく、情けなかった。」その後日、木内さんのメモはこう続く。

「〈恵まれたものは恵まれて、恵まれないものは恵まれない〉、それがずっとわたしに張り付いてきたことばだと気づいた。だがあれは、達観、というより、投げつけるように書いたのを、いまも体が覚えている。あの地震のときもわたしは、恵まれていた、苦さ。」

あれから23年、地震で大きく揺らされた街は、復興を遂げ大きく変わった。〈恵まれたものは恵まれて、恵まれないものは恵まれない〉。被災後の暮らしの中で、木内さんに張り付いたこの言葉が、今なお私の胸に重く響いている。23年の時を経て、恵まれないものは、復興の街の中で埋もれるように暮らしている。大きな地震に揺らされ、あの時は誰もがふるいにかけられた。恵まれたものも、恵まれないものも、生き抜くのに精一杯だった。それでも、恵まれたものは、恵まれている苦さを忘れてはいなかった。

今、あの時見えていたものが、見えにくくなっている。恵まれないものは、街の中に埋もれている。恵まれたものは、恵ま

れた苦さを忘れてはいないだろうか。忘れたことで恵まれないものを、埋もれさせてしまっていないだろうか。復興の影で置き去りにしてきたもののことを考えている。考え続けることが、埋もれさせないことだとも思っている。思考し続けること。それは、震災資料の収集保存とともに、「震災・まちのアーカイブ」が大事にしてきたことである。埋もれようとするものごとを、これからも私達は考え続けて行く。

「教訓として」ではなく

市村 登和

“アーカイブ”とは「未来に伝達すること」と言われているが、資料を通じて何をどのように未来へ伝達するのか。私たちが活動を通して思い巡らしていることであり、これからも心に留めていくことでもある。

活動と資料とを通して、阪神・淡路大震災直後から発せられた「教訓」という二文字・五音に対して、いつも心がざらつき、折に触れて「伝えるべきは教訓か」と、問いかけてきた。

なぜ、ざらつくのか。

資料からは、現場でひたむきに被災と向き合った「心」を感じる。葛藤もあれば苦悩もある。とにかく前を進もうとする姿勢や生き残った使命を果たそうと活動する姿もある。

そのような、被災後の日常から目を背けないこと、心を寄せ続けること、使命感を感じることに。それがあって初めて、被災

した者が残したいこと、伝えたいことが、後世の人々の内心に響いて「未来への伝達」となるのだと思う。ところが、組織が大きくなるにつれ、あるいは、当事者意識が薄い環境となるにつれ、被災の日常を置き去りにしたまま「震災を教訓に」、「教訓を後世に」、という一点に集約されていくことへの違和感をこの20年感じ続けてきて、心がざらつくのではなからうか。

看過しない立ち位置を保ち続けられたのは、この団体が公的な機関ではなく善意に支えられて活動する私的な団体だったからかもしれない。だから、たとえ組織体がこんなに小さかろうとも、私たちのような組織が存在し、疑念を疑念として発信・表現し続けることを伝え続けていくことが大事なのだ、とも思っている。

「震災・まちのアーカイブ」の目的について、設立当時のホームページ（旧ホームページ¹⁾）では、次のように紹介している。

私たちは、阪神・淡路大震災に関する記録と、その記憶を後世に伝えるという文化的なフィールドに位置するグループです。人びとが生きるコミュニティの中にアーカイブをつくることを活動の柱にしています。アーカイブ (archive) とは「文書館」や「資料館」を意味する言葉です。私たちは記録（震災一次資料）の収集・分類・保存・公開という活動のほかに、震災の記憶の問題を、日々出会う人びとを通じて、ともに考えることをもう一つの大切な柱としています。

1 「震災・まちのアーカイブ」の活動紹介ほか
URL:<http://archives-kobe.cool.coocan.jp/old/act.html>

語り、そして聞くこと

柴田 和子

私は阪神・淡路大震災記念協会に所属してきたころから、震災資料を収集することよりは、どちらかといえば、資料をいただいた方から震災体験をお聞きすることの方に興味を持ってきた。文章にはなっていないけれども、被災した人々は、それぞれに独自の震災体験があり、そこから何かを思い、行動へと繋げていた。震災がなければ歩まなかった道に方向転換して生きる人々に何人も会った。大きな信じられない体験だからこそ被災した人それぞれが苦悩し、何らかの解釈を加えて自分の中に取り込みながら物語を紡いでいく。その体験をお聞きできればいいと思い、資料をいただくときには、簡単なインタビューをさせていただいていた。

最近、震災・まちのアーカイブ（以下まちのアーカイブ）の活動を通して、インタビューに関して気づいたことが二つある。一つは、語りは変化するということだ。以前から震災資料をいただいていた長谷川さんから、少し体調を持ち直したので、資料もまだ少し残っているし、震災体験も話したいので、都合のいい時に来てほしいとお電話をいただいた。私たちは、体調に支障が出ないように短時間だけお話を伺おうと自宅を尋ねた。長谷川さんは、酸素吸入器をつけてだったが、去年の寝たきりでガリガリに痩せた姿ではなく、椅子に座れるまでに回復していた。そして、以前よりは食事が摂れるようになったためか、顔色が少し良くなっていた。

私たちは、主に語り部活動についてお話を伺った。語り部活

動をするきっかけから語り部活動の内容、震災が起こる前の暮らしぶりなど、お話は多岐に渡った。話は、順調な活動経過だけでなく、理不尽な拒絶や仲間内でのトラブルなど順調ではなかった時期の活動にまで及んだ。その内容には、以前お話しただいたことも含まれていたが、アーカイブ事務所に元気な足取りでおいでになった頃の怒りの口調の部分は消え失せ、淡々とした語り口調に変化していた。余命宣告を受けて入退院を繰り返し、寝たきりで声を出すのがやっとだった時を経て、今、病状は落ち着いている。そのせいだろうか、穏やかな語り口調で次々にお話をしていただいた。時間を大幅に超過して、インタビューは終わった。

まちのアーカイブでは、この数か月間、「語り部」について思考を重ねている。読書会のために読んだ大門正克氏の『語る歴史、聞く歴史』では、語りにおける言葉と身体をめぐる問題が取り上げられている。「語る歴史は、語り手の身体と分かちがたく結びついており、語られた言葉は、身体に及んだ苦痛や暴力と一体になる（大門 2017、P89）」。本の中では、朝鮮人強制連行や沖縄戦の体験の語りを指すのだが、まさに、災害でも同じで、震災で傷ついた精神は、語りと一体化し、そのうめきの中で語られる。ただし、長い年月を経た後に変化する身体とともに、語る言葉にも変化がもたらされる。病気に侵されて生死の境を彷徨い、そして、生還する体験を経ることで執着心が消え、淡々とした言葉で語られるようになる。体験した事実そのものは変わらないが、その後の解釈を通してみるものの世界は、変わっているのかもしれない。

さて、二つ目の気づきは、インタビューする側、つまり聞く側に関することである。大門氏の著書の中で聞くことの二側面についての記述が示唆的である¹。

1 大門正克『語る歴史、聞く歴史—オーラル・ヒストリーの現場から—』2017年、p.145

聞くことには二つの側面があると整理するようになった。一つは相手に尋ねることであり、もう一つは耳を傾けることである。英語で言えば前者はaskであり、後者はlistenになる。聞き取りでは、一般的に聞き手の側に聞きたいことがある。その際には必ずaskがあり、askに促されて語り手が語り始めることが多い。askは聞き取りという相互行為を成り立たせる大事なきっかけである。ただし、聞き手のaskの内容と語り手が語りたことが一致するとは限らない。そのような場合にaskだけでは語り手が語りたことを聞き逃してしまうことになる。語り手の語りに耳を澄ますlistenが必要になる。

果たして私はlistenをしていただろうか、聞きたいことが先行し、自分が聞きたいことのみを聞くaskばかりしていたのではないか。各方面で行ったインタビューでは、沈黙、口ごもり、そして話をそらす行為に対して、こちらが話の流れを軌道修正させることで対応してきた。それらの行為の中に重要な意味が隠されていると感じながらも気づかぬふりをして、語り手の意思をつぶし、こちらが聞きたい方向に誘導したのではな

2 個人が生涯でたどる道筋のこと。その時代の出来事が個人の人生に与える影響を重視する視点を持つ。

いか。

語るという作業、聞くという作業は連動している。聞く人がいることにより、語る作業が成り立っている。だからこそ、聞き手は出しゃばってはいけない。そのことを肝に銘じながら、問いに対して両方で明らかにしていく作業が必要だ。人々の震災体験は、一直線に防災には結びつかないものだ。しかし、個人のライフコース²における震災体験の意味とその変容を丹念に拾っていくこと、人々の語りに耳を澄ますことは大切なのではないか。

後日長谷川さんから電話があり、訪問時まだしゃべり足りていない部分もあるから、何回か来てもらって、話を聞いてほしいと言われた。まだチャンスはある。今度は ask ではなく listen をすることを心に留めながらお話を聞かせていただく。

電話を置いてもう一つ気づいたことがある。それは、語り手にとって話すことには「癒し」の機能もあるということだ。聞き手に自分のことを語るにより人生を振り返る機会を得ること、それにより心の整理をつけること。語るという行為は、確かに効果があると感じるのだ。

災害資料の展示について

水本 有香

東日本大震災の発生から7年が経過した。大規模な被害を受けた宮城県、岩手県において、東日本大震災に関する震災資料（現在は、「災害資料」と呼ばれることがある）は、それぞれ、「東日本大震災アーカイブ宮城 ～未来へ伝える記憶と記録～」¹および「いわて震災津波アーカイブ～希望～」²が制作、公開された。両県とともに、地震、津波被害に加えてその後の福島第一原子力発電所事故による未曾有の被害を受けた福島県双葉町には、「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設」の建設が予定されている。現在、福島県はその施設に収蔵する震災資料の収集を開始した。収集に際し、アーカイブ拠点施設（仮称）に関する資料収集ガイドラインが策定され、インターネット上で公開されている³。どのような震災資料が収集

1
<https://kioku.library.pref.miyagi.jp/>
 2
<http://iwate.archive.pref.iwate.jp/>
 3
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11055b/svuusvu>

福島県において
 収集する震災資料分類と例

資料種別	主な事例
日記	被災者・関係者による日記、被災者による日記、被災者による日記、被災者による日記
写真	被災者による写真、被災者による写真、被災者による写真、被災者による写真
音声・映像	被災者による音声・映像、被災者による音声・映像、被災者による音声・映像、被災者による音声・映像

人と防災未来センター
 において収集する震災資料分類と例

対象となっているか、「資料の分類と例」を見ると、一次資料として、「東日本大震災及び原子力災害を直接に示すもの、および被災直後から被災地の復旧・復興の過程において、使用・作成されたもの」、二次資料として「東日本大震災及び原子力災害、防災関連の刊行物」が挙げられている。

阪神・淡路大震災で生き延び、2002年から震災資料の収集などに携わってきたわたしはこの図とよく似た表を見たことがあった。阪神・淡路大震災の資料を収集、保存、整理、公開している人と防災未来センター所蔵の震災資料の概要である⁴。「阪神・淡路」と「東日本」の文言以外はほぼ同じである。第二人と防災未来センターの誕生を予感させる。

この展示施設は誰のためのものか。誰の目線の物語なのか。福島県民なのだろうか、福島県庁なのだろうか。当事者である福島県の被災者は、この施設へ見学に行くだろうか。非当事者である次の世代が見学に行って、福島県における被災前、直後、復旧、復興の状況が分かるのだろうか。福島県内のそれぞれのとき、それぞれの地域の、それぞれの人や組織など、ばらばらのお話が展示ストーリーに合うように並べられると、非当事者が震災についてすべて分かったような気になる装置が展示に孕まれている。

福島県において、デジタルアーカイブだけではなく、現物資料が収集され、施設に展示されるという点では、被災した「場」において、現物資料の「力」を活かすことが出来るのは意義深い。基本構想（H29.3）により、すでに「展示ストーリー」という名で、展示施設のお話の流れは出来上がっている。「プ

ロログ」(1. 原発誘致、2. 事故前の日常)、「災害のはじまり」(1. 地震・津波の記録、2. 災害のはじまり、3. 原発事故と安全神話の崩壊)、「原子力災害の影響と対応(初期)」(1. 放射線からの避難、2. 放射線への不安、3. 国内外からの注目)、「県民の思い」(1. 事故前の故郷の日常と原発のもたらしたものの、2. 事故後の変化(変化した日常))、「原子力災害の影響と対応(長期化)」(1. 風評の払拭、2. 除染、3. 健康不安、4. 避難)、「復興への挑戦」(1. 復興への取組、2. 新しい産業づくり、イノベーション・コースト)、「その他」(展示ストーリー以外のもの)と細かく決まっている。例として、「風評の払拭」では、「①観光への影響を伝える紙資料、写真、映像、新聞記事、証言等、②農林水産業への影響を伝える紙資料、写真、映像、新聞記事、証言等、③その他多種の産業への影響を伝える紙資料、写真、映像、新聞記事、証言等」が挙げられている。

23年経っても、わたしは誰ひとり、家族内でさえも、まったく同じ被災体験や想いを共有しきれないままである。福島県の浜通り、中通り、会津地方の県民の間で被災体験だけでなく原発誘致、事故前の日常も異なるだろう。各自治体間でも異なるだろう。災害展示に用いられるために収集される震災資料の例が阪神・淡路大震災と東日本大震災と同じなのだろうか。異なる体験の中で、体験を共有するには災害展示を如何にすればよいのか。まだ確固たる正答も王道も持つことができず、問い続けるしかないと思うわたしがいる。

記憶と記録

佐々木 和子

震災・まちのアーカイブ（以下アーカイブ）は、「震災の記憶と記録を考える」グループとして生まれた。前身は、1995年3月末にできた震災・活動記録室（以下記録室）である。記録室は、ボランティアをコーディネートするボランティア団体、阪神大震災地元NGO連絡会義内に設立された。ボランティア自身が、自らの救援の記録を残そうと始めたのである。その後、記録を残すことだけでなく、被災地での情報発信にも活動の幅を広げ、3年後の春、活動の主軸をそちらに移すことになった。

一方、1995年10月に始まった兵庫県の震災資料保存活動には、被災資料のレスキューを行うボランティア団体、歴史資料保全情報ネットワーク（現在歴史資料ネットワーク、以下史料ネット）が大きな役割を果たした。史料ネット『ニュースレター』第4号（1995年11月10日発行）には、「震災に関する記録保存をめぐる状況」を掲載し、12月には、兵庫県から委託を受けた外郭団体、財）21世紀ひょうご創造協会（以下創造協会）と相互協力についての意見交換を行った。この背景には、被災自治体の文書保存をめぐる体制が必ずしも整っておらず、刊行物を中止としたものはある程度保存されるにしても、行政文書や資料類の網羅的な収集保存が行われるとは考えられなかったためである。そこで、史料ネットは、従来から資料保存に関わっている近現代史研究者や全国歴史資料保存連絡協議会の会員たちに声をかけ、兵庫県の資料保存に関わっていくことになった。その後押しを受け、創造協会は、1996年2月と

10月に「震災資料の保存と編さんに関する研究会」を開催し、意義や課題の共有化に努めた。また資料収集を担当する嘱託職員の確保に尽力した¹。

1998年2月、私は、史料ネットの寺田匡宏さんと、神戸市長田区の神港金属の事務所に向かった。記録室が活動を終えらしいと聞き、そこで集められていた資料類がどうなるかを確かめるためだった。寺田さんから、「長田の社長さんご夫妻と、その資料の今後について、話し合う予定がある」との話があり、同行をお願いしたのである。当時私は創造協会の震災資料収集担当の嘱託であり、記録室のボランティア資料の存在を知っていた。その日の話し合いが、震災・まちのアーカイブ設立につながっていく。

1998年3月14日、設立のつどいを、神戸市長田区の事務所で行った。その日配布されたのが、本書の最初に掲載した「震災・まちのアーカイブ設立にあたって」である。そこでは、「資料を残すことを通じて、震災の記録を後世に伝える」と宣言し、「被災地の記憶と記録を考える」とともに、被災者自らが、「記憶をたどりながら、様々な記録を検証」し、震災の問題を考える場をまちの中に作ろうと、「まちのアーカイブ」を設立したと続けた。

アーカイブに集う人たちは、主婦、詩人、ボランティア。必ずしも歴史や記録保存に関わる者ばかりではない。また、記憶へのまなざしが議論され、記録から落ちていくもの、いまだ書かれないものへの態度や、記録の収集自体の自明性も問われた。

震災発生から約5年を経た2000年春、「阪神・淡路大震災

メモリアルセンター（仮称）」の構想が明らかになった。県民による展示計画案の募集を行うなど、開かれた構想のように見えたが、実態は短期間に県担当者、委員、業者の間で決められていくものだった。アーカイブでは、瓦版なまらずで特集を組み、議論を呼びかけ、シンポジウムで発言していった。また、7月には県のメモリアルセンター整備室を訪問し、「阪神・淡路大震災メモリアルセンター展示計画に関する公開提言」（P.44に掲載）を手渡した。そして、設置直前の2001年12月、メモリア正式名称が公募によって「人と防災未来館」に決定したと報じられ、メモリアル語もはずされた。

その後、震災の記憶やその表現への思索は、アーカイブのメンバーも加わった[記憶・歴史・表現]フォーラムの場で深められた。フォーラムは、2001年に国立歴史民俗博物館に活動の場を移した寺田さんを中心としたもので、2002年からトヨタ財団の助成を受けたものだった。成果は、2005年1月、

「**someday, for somebody** いつかの、だれかに 阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想 | 展」（以下、ミュージアム構想展）で公開された。「柵へー〈未来〉の配達のために」は、アーカイブのボランティア資料が用いられたインスタレーションであった。

20年を経て、アーカイブの出発の時について、思い巡らした。季村さんご夫妻と初めて会った日は、確か設立の1カ前の2月14日。その日に記録室の資料の話題から、新グループ設立、名前を決めた。そうずっと記憶にとどめていた。本書を編むにあたって、正確を期したいと、当時の活動ノートを探した。

そこに書かれていたのは、2月14日以前にすでに事務所を訪問し、季村範江さんに連絡先を書いていたこと。その後、2月14日に再度事務所で名前を決めた様子などがメモされていた。最初の出会いの日は書かれていなかったが、史料ネット『ニュースレター』第11号（1998年2月3日発行）の記述やそれに対応するノートの記述から、2月1日から6日の間であろうと判明した。

これらのことは、断片化された記録（＝資料）でも集められると「事実」に近づきうる事を示している。また、2005年1月、ミュージアム構想展で「棚へ」を企画した笠原一人さんは、「コンセプト解説」²の中で、「震災一次資料は、震災という出来事の痕跡」、「痕跡は、だれもが触れることのできるものであり、いつかのだれかにその記憶を伝えることを可能にする」とした。一方、「痕跡は断片化され」「コントロール不可能なものとなり、その記憶がいつかのだれかに確実に届けられる保証はない」としながらも、「届かないかもしれないという可能性の〈未来〉」に賭けて送り出す」ことよってのみ可能性があるとした。

20年の活動を経て、今私たちが行うことは、次の未来に向けて、記録の未来を信じて送り出すことにある。一步一步、そのための活動を続けていこうと思う。

2 [記憶・歴史・表現]
フォーラム『someday,
for somebody いつかの、だれかに 阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想 | 展』2005年、p.40

所藏資料概要

浜畑啓悟氏資料

- 1 資料名： 浜畑啓悟氏資料
- 2 資料作成時期： 1995年1月～1997年
- 3 数量： 12点
- 4 出所： 神戸市立中央市民病院医師 浜畑啓悟氏
- 5 提供者情報： 震災当時神戸市立中央市民病院勤務医師
- 6 受け入れ時期： 1999年9月11日
- 7 受け入れ経緯： 震災当時神戸市立中央市民病院勤務であった浜畑圭悟氏は、実吉威（震災・活動記録室代表）の高校の後輩。震災当初から「阪神大震災地元NGO連絡会議」に出入りしていた。その縁からアーカイブに資料を寄贈された。
- 8 資料内容： 医師として震災当初から保健所や病院や様々な場所で活動。その時の会議資料や本人及び他の医師の感想文等
- 9 保存状況： 震災・まちのアーカイブ内に中性紙箱に入れて保存
- 10 関連事項： 季村範江「資料の公共性」（「瓦版なまず」第6号）で受け入れ経緯について紹介

「すたあと長田」資料

- 1 資料名： 「すたあと長田」資料
- 2 資料作成時期： 1995年1月～1998年3月
- 3 数量： 188点、ファイル 30点
- 4 出所： 「すたあと長田」(神戸市長田区)
- 5 提供者情報： 1995年4月1日、長田区御蔵のプレハブ仮設にて発足。震災直後、東京から長田区に入ったNGO「ピースボート」の活動を引き継ぐ形で「すたあと長田」が誕生。ピースボートの活動の柱、生活情報誌「デイリーニュース」の発行を受け継ぎ、長田密着情報誌「ウィークリーニュース」を1998年3月まで発行し続ける。避難所、仮設の手伝い、高齢者支援、車椅子マップの作成、住宅情報、イベントの発信など。長田に住む人々の自立、まちづくりの支援、被災後長田を離れた人々への情報発信など、地元根差した活動は多岐に渡った。

1996年1月17日長田区に開局したFMわいわいにて、同年3月よりラジオ番組「サタデーエクスプレス」の放送を開始する。

2009年に災害支援専門チーム「チーム神戸」を結成。2017年12月現在、活動を継続中である。
- 6 受け入れ時期： 1998年6月～12月まで5度に渡り、「震災・まちのアーカイブ」に寄贈

- 7 受け入れ経緯： 受け入れについての詳細は、1998年6月20日、寺田・佐々木、「すたあと長田」事務所にて受取。8月13日、佐々木、金田真須美氏より受取。11月28日 吉田伸好氏、アーカイブ事務所に持参。12月3日、寺田、吉田氏より受取。12月26日 吉田氏、アーカイブ事務所に持参。
- 8 資料内容： 阪神・淡路大震災1995年1月～1998年3月までのボランティア活動の記録、活動の柱となった「ウィークリーニーズ」vol.01～vol.51までの全号。仮設・借り上げの住宅情報、他県からの被災者受け入れ情報。ウィークリーニーズ・車椅子マップ作成版下、生活・イベント情報、他団体の通信。飛散アスベスト対策資料がファイル数冊に収められている。
- 9 保存状況： 「震災・まちのアーカイブ」内に中性紙箱に入れて保存

住吉グループ資料

- 1 資料名： 住吉グループ資料
- 2 資料作成時期： 1995年～2000年
- 3 数量： 9点
- 4 出所： 笠原和子氏（神戸市東灘区）
- 5 提供者情報： コープ神戸の主催するボランティアグループ
「住吉グループ」の代表。震災・まちのアーカイブ代表季村
範江の知人
- 6 受け入れ時期： 2000年7月4日
- 7 受け入れ経緯： 笠原和子氏と季村範江はかねてからの知人。
その縁で震災直後から活動していた記録や品物を寄贈され
た。
- 8 資料内容： 震災当初からコープ神戸の主催するボランティ
アグループの一つとして仮説住宅を訪問。その時の記録や慰
問の品
- 9 保存状況： 「震災・まちのアーカイブ」内に中性紙箱に入
れて保存

「ジェネシス」(GENESIS) 資料

- 1 資料名： 「ジェネシス」(GENESIS) 資料
- 2 資料作成時期： 1995年4月～1995年8月
- 3 数量： 2箱(中性紙箱)
- 4 出所： 「ジェネシス」岡田光生(大阪市)
- 5 提供者情報： 震災発生から3か月後、被災者が職場、学校、地域社会へと復帰しはじめた。避難所から仮設住宅などへ居住場所を移転する中、自分たちで生活を立て直そうとしたが、新たな生活を始めるために、ほとんどの生活関連用品を新たに準備する必要があった。その一方、全国では、日常生活で使われていない家庭用品、台所用品、家電製品などが多数ある。JNAP[あげます・ください列島リレー]の企画は、それらの品物を全国から募集し、被災者が新生活を始める際に役立ててもらい、その経済的負担を少しでも軽減するため、立ち上げられた。新生活のスタートの際に必要な家庭用品80余品目を厳選し、そのリストから品物を選択し、「あげます」、「ください」の双方が応募し、品物は郵便小包や宅急便を利用して送付できることを前提として、事務局が「あげます」、「ください」の双方に適切な相手を紹介し、品物は全国から直接「ください」の方へ送付するプロジェクトを実施した。事務局が置かれた GENESIS の岡田光生氏はプロジェクトの起案者

- 6 受け入れ時期： 2007年1月14日
- 7 受け入れ経緯： 岡田光生氏と佐々木康哲（藤原直子さんの兄）氏とが知人で、その紹介でアーカイブ事務所に電話があり、その後、資料が郵送された。
- 8 資料内容： JNAP[あげます・ください列島リレー]に生活用品などの品物を応募した「あげます」、「ください」双方のがき、プロジェクトの広報が行われたラジオ番組の録音テープ、プロジェクトの報告書などの関係資料が収められている。
- 9 保存状況： 「震災・まちのアーカイブ」内に中性紙箱に入れて保存

三浦照子氏資料

- 1 資料名： 三浦照子氏資料
- 2 資料作成時期： 1995年1月～
- 3 数量： 42点
- 4 出所： 三浦照子氏（芦屋市）
- 5 提供者情報： 画家、詩人、被災地クラブメンバー
- 6 受け入れ時期： 2011年5月11日
- 7 受け入れ経緯： 三浦照子氏と「震災・まちのアーカイブ」顧問の季村敏夫とが知り合い。「震災・まちのアーカイブ」が「被災地クラブ」に出入りしていた縁で資料の寄贈を受ける
- 8 資料内容： 震災当時居住していた芦屋ハイタウンは建て替え決議により解体され建て替えされた。そのいきさつに納得がいかず、裁判し4年後に和解。その経緯をスイスのジュネーブで社会権規約に関する国連会議で報告、それら一連の資料と、三浦氏の出版した本
- 9 保存状況： 「震災・まちのアーカイブ」内に中性紙箱で保存
- 10 関連事項： 資料紹介「被災地から世界へ」（瓦版なまず第27号）で紹介
- 11 備考： 被災地クラブは、被災マンションの建て替えを巡り、異議を申し立て、裁判を行ったグループ

震災・活動記録室資料

- 1 資料名： 震災・活動記録室資料
- 2 資料作成時期： 1995年～2015年
- 3 数量： ダンボール箱 24箱 BOXファイル 2箱他
- 4 出所： 震災しみん情報室（現市民活動センター神戸）
- 5 提供者情報： 1995年から1998年までは「震災・活動記録室」1998年から「震災しみん情報室」と改称。被災地の復興と市民活動の両方を情報によって支える。1999年「市民活動センター神戸」と改称
- 6 受け入れ時期： 1999年7月10日／1999年9月25日／1999年12月11日／2002年8月31日／2015年4月25日
- 7 受け入れ経緯： 「震災・まちのアーカイブ」は震災・活動記録室の資料を引き継いで出来たグループ。活動を終了した資料は暫時アーカイブに移管されることになっている。
- 8 資料内容： 震災関連資料、活動資料、ミニコミ、書籍等
- 9 保存状況： 震災・まちのアーカイブ内に中性紙箱と段ボール箱で保存

長谷川忠一氏資料

- 1 資料名： 長谷川忠一氏資料
- 2 資料作成時期： 1995年1月～
- 3 数量： 34箱
- 4 出所： 長谷川忠一氏（神戸市中央区）
- 5 提供者情報： 震災発生で自宅は全壊、直後から自宅近くの
行吉学園に避難した。その日から避難所閉鎖までの8か月間、
避難所での生活を送りながら避難所リーダーとして避難所
全体の取りまとめを行った。その後、ポートアイランドにで
きた仮設住宅に移動。被災生活を送る中で、仮設ふれあいセ
ンターでの催し物案内や自治会連絡物など、仮設住宅にまつ
わる配布物を保管した。その後、HAT神戸の復興公営住宅に
当選、転居した。1999年からは、元仮設住宅住民らと「語
り部グループ117」を立ち上げ、被災地の思いを伝える語り
部活動を行った。主には神戸に修学旅行で訪れた学生らに被
災体験を語った。2003年頃からは、県外の小中学校や防災
講習会で震災体験談を語る「出前語り部」を開始し、全国か
らの依頼にこたえた。
- 6 受け入れ時期： 2012年5月20日／2013年6月9日／2015
年4月25日
- 7 受け入れ経緯： 長谷川忠一氏より柴田和子へ資料寄贈の申
し出あり。資料点数の多さから個人での引き受けに困難が生

じ、「震災・まちのアーカイブ」へ受け入れを相談、長谷川氏の了承を得た後、長谷川氏宅から数度にわたり資料の運び出しを行った。

8 資料内容： 長谷川氏の震災後の軌跡をたどるように、避難所、仮設住宅、復興公営住宅の関連資料が収められている。また、語り部活動の際に使用された配布資料やその様子を収録した映像資料などの語り部関連資料も収蔵されている。

9 保存状況： 震災・まちのアーカイブ内に中性紙箱で保存

10 関連事項： 「瓦版なまず」第28号に長谷川忠一氏インタビューを含め掲載

ミニコミ資料

- 1 資料名： 「ミニコミ」資料
- 2 資料作成時期： 1995年1月～
- 3 数量： 個別フォルダ収納 121タイトル、バインダー収納
157タイトル、同157タイトル分を電子記録化したDVD
(記録保存用) 4点
- 4 出所： 阪神・淡路コミュニティ基金／震災・活動記録室／
震災・まちのアーカイブ／個人蔵／ [不明分あり]
- 5 提供者情報： 阪神・淡路コミュニティ基金 (以下、基金)
は震災から1年半近く経った1996年5月に発足。基金は競艇の特別レースの利益の一部8億円を原資として、日本財団により設立。日本財団は震災直後から被災地の支援に積極的に行ってきたが、被害があまりにも大きく、またその一方でボランティア活動の新しい動きが次々と生まれてきたため、ボランティア支援のために特別の基金を設け現地に事務所を置き本格的な支援を行うことになった。
- 6 受入れ時期： 1995年3月～
- 7 受入れ経緯： 団体及び個人蔵の資料が「震災・活動記録室」
や「阪神・淡路コミュニティ基金」から移管されたものと、
震災・まちのアーカイブへ直接送付されたものがある。
- 8 資料内容： 阪神・淡路大震災に関する内容が記載されている (マスコミではない)「ミニコミ」資料群。被災地で活

動しているボランティア団体から発信されているものが大半である。一部、被災地外から被災地について継続的に取り上げているものや、「災害」をキーワードとする内容で発行されたものを含む。初期から発行されたミニコミは、生活情報に近い内容で日刊や週刊されていた資料がある。

9 保存状況： 目録作成によって、タイトルを把握した。ただし、巻号詳細は不明。

収納は、タイトル毎の所蔵数により二通りに分けている。

①個別フォルダ（所蔵数が少ないタイトル分）：タイトル毎に五十音順に収納し、更にボックスファイル7箱に分けて、五十音順に棚に保管している。②バインダー収納（一定数の所蔵あるタイトル分）：タイトル毎に五十音順にクリアフォルダーに収納し、バインダー保管しているものと、クリアフォルダーには保管せず直接パンチレスファイルに保管しているものがある。

10 関連事項： 所蔵するミニコミ誌の一部は、someday, for somebody いくつかの、だれかに構想 | 展 (2005. 1. 14-23 CAP HOUSE にて開催) での「棚へ -〈未来〉の配達のために -」作品へその複製を提供。

11 備考： 「瓦版なまず」第25号（2009年4月）には、タイトル一覧、「震災・活動記録室」時のミニコミ収集の記述あり。神戸大学震災文庫所蔵状況を確認した結果、バインダーに保管している資料157タイトル中、震災・まちのアーカイブのみが

所蔵している資料が、36 タイトル (2017 年 10 月～11 月調査)

—ミニコミを整理して

所蔵数が少ないタイトルのミニコミは、コミュニティ基金が、ボランティア団体の概要を把握するために各団体の活動が分かる資料提供を各団体に求めた結果、各団体が、自団体で発行している情報誌を提出、それをコミュニティ基金が保管したものと推察される。また、発行自体が短期間、特定号のみで震災を取り扱った、当アーカイブとの関係が希薄等の理由で、震災・まちのアーカイブでの所蔵数が少ないとも考えられる。

資料保存を謳いながらも所蔵巻号の詳細にまで活動を進められていない状況に忸怩たる思いはある。しかし、限られた時間と人数というボランティア活動の現実でもある。

ミニコミ誌は、発行部数からしても一次資料に近く、収集意義は十分ある。震災初期から広くその収集と保存をしていたことは大変貴重で、移管された責任も大きい。

また、当時はすべてを保存する意義があったと思うが、震災後 20 余年を経て他の機関でも所蔵が確認できている「今」からは、私たちの活動を所蔵の少ない資料に絞って重点的に取り扱っていくのも一案ではないか、ということでもある。

その他の主な寄贈品

①村尾健吉氏

内容： 《六甲大地震》破壊現象度探索項目集／阪神大震災
に関連する新聞記事の切り抜き集成 42巻

受入日： 2001年6月8日

②神生善美氏

内容： 震災当時全国から送られた救
援物資の粉ミルク等。鷹取中
学校倉庫の建て替えの為



受入日： 2008年6月15日

③すみとも正成氏

内容： すみとも氏の個人誌『断片』より、1998年1月～
2003年8月（A3/64枚）

アーカイブが瓦版や冊子を発行する度に郵送された感想



